

## 四旬節第2主日 (マタイ 17:1-9)

旅立った先でも「神の独り子イエスの声」を聞く



今回は、Linux Mint 上で LibreOffice Writer を立ち上げて説教を書いています。先週、「四旬節を過ごすためのテーマを考えてみましたか」と話したのですが、中田神父は、自分のしていることを誰かのためにする。そういうテーマで四旬節を過ごしたいです。大切な人のため、心配な人のため、ほかにもいろんな誰かのために自分を使う。それが、私の今年の四旬節です。

福音朗読の中でも、イエスのために生き始めた弟子たちのことが書かれています。ペトロ、ヤコブ、ヨハネです。彼らの人生の前半は漁師でした。この世で、自分たちの生活のために生きる人たちでした。それが、イエスと出会って、イエスのために生きる人になったわけです。別に、悲しい顔をして、それこそ四旬節の過ごし方としてイエスのために生きているのではなく、自分でこの道を選んで生き始めました。

イエスのために生き始めたので、どんなことでもイエスのためにと、思って、イエスが喜んでくれるだろうと思って動きます。「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白く」(17・2) になります。そこでペトロが、「ここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」(17・4) と提案します。「きっと喜んでくれるに違いない。」そう思ったでしょう。

ペトロの提案に、返事はありませんでした。むしろ、ペトロの提案は遮られました。「ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。」(17・5) ペトロの提案は遮られ、「イエスのために生きる人になりたければ、このように生きていきなさい」という声が聞こえてきます。

「すると『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた。」(17・5) イエスのために本当に必要なことと、「この提案は、きっと喜ばれるに違いない」ということとは、違う場合があるようです。

しばしば、私たちは自分のアイデアを自画自賛します。誰も成し遂げられなかったことを成し遂げた。誰も思いつかなかったことを実行に移した。そこまででなくとも、自分が別の場所で成功したことを違う教会でも実行して、そこに満足を感じる。心の中で、「イエス様、ここでもこの取り組みを成功させましたよ。地元の信徒たちは疑問に思っていたけれども、今は自分のものにして実行していますよ」と、イエス様がきっと喜んでくれるに違いないと考えてしまいます。

しかし、雲の中から聞こえた声をよくよく考えると、自画自賛していたことは、本当にイエスが求めていたことなのだろうか？考えさせられます。まずは「イエスに聞くこと」これが何より大事です。これなしには、イエスの本当の望みを聞き分けることはできないのです。今日こ

ここに、「旅立ち」を迎えようとしている中学生・高校生たちが集まっています。彼らに私の説教はどう聞こえているのでしょうか。

何かちょっとでも、「まずはイエス様の声をしっかり聞くことが大事なのだ」ということが伝わっていれば幸いです。全然伝わってなければ、今週の説教は「0点」ということになります。準備に何時間もかけた挙句に0点では情けないですよ。

司祭になる人たちは、何段階かの奉仕者に認められる必要があります。大きくは朗読奉仕者に選ばれ、次に教会奉仕者に選ばれ、助祭の叙階式を受け、さらに司祭叙階の妨げがないかをちゃんと調査した上で、司祭に叙階されます。私が大神学生の頃は、それぞれの段階に進む頃になると、しばしば聖堂にその時を迎えようとしている先輩方がひざまずいて祈っていました。

消灯時間前は別に不思議ではありませんが、私がどうしても取りに行かないと困るものを聖堂に忘れてしまい、夜中にパジャマのまま聖堂に行くと電気をつけたら、助祭叙階を前にした先輩とかがひざまずいていました。その先輩から睨みつけられまして、「ごめんなさい！」と謝って自分の忘れ物を取り、電気をまた消してから帰りました。

それ以降は、どんなに困っても電気をつけずに忘れ物は手探りで探すようにしました。そんな場面でも、祈っている先輩が、音も立てずにいたのを覚えています。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け。」先輩たちが見せてくれたありがたいお手本でした。

「父なる神の御独り子イエスの声を聞こうと努力したら、本当に聞こえますか？」私は「はい。聞こえます」と言いたいと思います。司祭たちは毎週説教を準備しますが、チャット GPT ではないのでいつでも思い通り説教が書けるわけではないのです。そうすると、資料をもう一度見直したり腕を組んだりしてなんとか前に進めようともがきます。でも書けない。

しかし、あるときふっと、原稿が降ってくる時があるのです。

「あっ！これだ。」そこからは、降ってきたものを一気に書き留め、おかげでその週は救われたということが私は頻繁にあります。これこそ、「これを書きなさい」という「父なる神の声」「イエスの声」ではないかと思うのです。だから主任司祭である中田神父は、「父である神様の声を聞こうと真剣に努力する人には、イエス・キリストを通して本当に声が聞こえます」と伝えたいです。

道に迷うこともあるでしょう。人に騙されることもあるでしょう。まだその時でもないのに、帰りたくなることもあるでしょう。しかしそういう時、あなたが転出していった場所にいちばん近い教会で、イエス様の声を聞こうと努力してください。暮らしているアパートでお祈りしてみてください。

聞こうとして聞けるものではないかもしれませんが、けれども必ず、必要としている人に父なる神は、イエス様の声を届けてくださいます。